

47 我が街 船橋を歩く 船橋の魅力 (18)

—海(5) 船橋の五大力船—

29期 仲田 元昭

船橋の海・魅力シリーズ5回目、江戸100万人都市の生活を物流面から支えた、船橋の荷船「^{ごだいりきせん}五大力船」の活躍と、新田開発で江戸に貢献した船橋をご案内します。

「江戸の発展に貢献した五大力船」

房総で収穫された穀物・薪炭等を家康公が慶長年間(1600年代)に開削した小名木川を經由し、船橋から江戸河岸へ、水運で活躍した船が「五大力船」です。

これまで馬、荷車での陸送に比べ、輸送時間(6時間⇒2時間)で1/3に短縮、輸送量(約4石⇒350石)で約80倍に増大、威力を発揮し江戸の発展に貢献してきました。

江戸時代から昭和初期(母校の1,2期生は船橋の五大力船を見たかもしれません)まで、帰りは酒、衣料、日用品等と共に「江戸文化」をいち早く房総に運んできました。

海川両用の小型帆船、積み荷350石程、長さ10~20m、海では帆を、江戸市中では「さお」を使い、浅い川にも運ぶことが出来ます。海老川河口には、佐倉藩の年貢米保管の倉庫含め6軒の廻船問屋がありました。

「江戸城へ活魚を献上」

江戸前高級魚、出世魚「スズキ」の水揚げ日本一で有名な街が船橋です。

家康公が1615年11月船橋御殿に宿泊された時、船橋浦の魚を食されこれは上手いとお褒めになり、船橋浦(御菜浦)の独占漁業権を与えられ月に数回、鮮魚を江戸城へ幕府御用達として献上していた誇り高い村でした。

「新田開発」

江戸の人口増加の食料供給のため船橋市域では、延宝年間(1673年代)に幕府の放牧場・馬牧の一部の原野を開墾し新しく田畑とする、7つの新田が開発されました。

船橋駅の北1km程の台地は、行田新田として開墾され、その他に上山、藤原、丸山、前原、滝台、新保の各新田も開墾され、代官の支配地(幕府直轄地)となり、食料供給面でも江戸の発展に貢献してきました。



船橋漁港の冷凍倉庫壁絵の五大力船



船橋漁港壁画の五大力船 拡大絵



船橋の雨水マンホールの五大力船

(参考図書：船橋のあゆみ他)
「48 我が街 船橋を歩く に続く」
「2024-10-1 寄稿」